
ラブカクテルス その10

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その10

【Nコード】

N8640C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は小さなくも壮絶な闘う戦士のカクテルをご用意いたしました。彼が飲んだかどうかは。あなたもご一緒にご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は手強い相手でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺の勝負は始まった。真剣勝負。男と男の一对一の、勝つか負けるかの大勝負である。

恥ずかしい事に俺はまだこの勝負に勝つたことがない。それくらい相手は強者なのだった。

しかし、俺は諦める訳にはいかなかった。

さっさとこの勝負を終わらせて、仲間たちの待つ飲み屋で酒盛を交すのだ。

その味わいといえば半端なものではないはずだ。

おっと、いけない。危うく気を持って行かれるところだった。危ない危ない。

俺は気を引き締め直した。そして、つい最近編み出した技を思い起こした。そしてイメージトレーニングをはじめたのだった。

イケる。今回は完璧だ。

俺は薄っすらと笑みを浮かべたのだった。

俺は手の内にある奴の事を思い返し、顔を合わせると、奴はいつもと変わらずに余裕の笑みを浮かべている。さすがにもう慣れたものだ、負ける様子もこれっぽっちも感じさせない。

しかしいつも思うのだが、あの元気と自信はどこから湧いてくるのか不思議である。

奴はいつもの戦法で俺にケシ掛けてきた。

いつもの軽いブローだ。あの笑みを喰ったら初心者だったらイチコロだ。間違いない。

俺もどれだけあれにやられたことが。

でも今日はそんな事ではやられはしない。

奴もその揺るがぬ俺の表情を見て、少し余裕の笑みを崩した。しかしさすがは俺の宿敵。怯むまではいかずに、大きな目をこちらに向けて、遊んでやるよと俺の心の中の柔らかい部分に訴え掛けてきたのだった。

俺も昨日までの俺とは違うところを妻が見ている手前もあり、男としての堂々たる姿を見せてやることをその目に決意の硬い意識を投げつけたのだった。

妻は俺にこの戦いは無理だと悟てきた。しかも笑ってだ。

俺は頭にきた。俺だってやるときはやるのだ。

男というものを見せつけて、その馬鹿にした目を初めて会った時のようにうつとりとした眼に変えてやるっ。みていろっ。

俺の体に一層力がみなぎってきたのを感じた。

俺は奴を見た。穏やかなその表情は変わらなく俺に向けられて、いつでも来いと俺に目で訴えていた。

俺はまず、いつものスタンスでありふれた攻撃に出た。

いつもなら対して効かないベーシックな技だが、何回かこの手で勝負を付けている妻の攻撃を見ている。

もし奴が疲れているなら、そんな技でも十分にイけるはずだった。

しかし、そんなにうまくはなかった。

やはりといったところだ。

予想はしていたものの、これで長丁場になるのは必然だった。

俺の気持ちはそのあっさりとしたかわし技に上がっていたテンションを冷まされたが、すぐに持ち直すことに苦を感じなかった。

そうさ、俺には、今日の俺にはあの技がある。それで決まるはずなのだから。

俺はまだ余裕の笑みを見せる相手を睨み返すと、左の口元を少し吊り上げた。そして足を自分の肩幅と同じ寸法に開いたのだった。すると、その姿を見た妻の表情が一瞬驚きに変わった。

俺は天から何かが降りてくるのを感じた。

よし、今だ。

俺は余裕の笑みを浮かべた奴に攻撃を開始した。

俺の新しい技はいつものベーシックなもの比べて与える振動波が違う。まるでそれは車に

伝わる小刻みな揺れ。縦のウェーブ。本能の奥底からくすぐるような甘い罠。

奴は俺の攻撃に余裕の笑みからためらいの表情を見せた。

どうだっ、味わったことがない体感だろ。俺は少し体をよじって嫌がる奴に容赦はしなかった。

逃がすものか。俺の攻撃は続いた。

そして奴は力を俺に奪われていくようにその甘い罠に酔いはじめたのだった。

でもこれくらいで参る相手ではないのは分かっていた。

俺にはまだ隠している技があった。それを出すときがいよいよ来た。

俺は部屋と廊下を隔てている引き戸をゆっくりと開けた。

妻は首を傾げてこちらを見て、何か心配そうな顔をしている。

俺はそんな事をヨソに廊下の電気を消した。そこには一瞬にして暗闇が訪れた。

俺はその引き戸の開いたドア枠を跨ぐようにして、さっきと同じように自分の肩幅と同じ位置で足を開いた。そして、もう半分すでに堕ちかけている奴にとどめを射すべく必殺の攻撃にでたのであった。そこは光と影が織りなすハーモニー。

明るい精と暗い精がコントラストを紡ぐ幻想。それに加わえて伝わるこの振動。

勝った。奴は白目を剥きつつ、それでも必死な抵抗を続けたが、俺の必殺技に見事に屈したのであった。

さすがは俺の宿敵。見事だ。あっぱれだった。

俺は腕に抱いた眠りの世界へ旅立った奴を宝物のように大事に優しくベッドに下ろした。

だが、時々下に下ろした震動で、再び目を開けることが度々あるのだ、横にした後も、少しの間お腹辺りを優しくポンポンしてやった。もうこれで完璧な最後を決めたのであった。俺はゆっくり立ち上がり、こちらに視線を向ける妻にガッツポーズをかました。しかし、妻は首を横に振った。

振り返って奴を見たが、何も変わらずにグッタリとしている。

俺は妻にジェスチャーで何だ？と伝えたが、妻は笑みを浮かべて奴の方を指差した。

俺は恐る恐る奴に再度振り返った。

すると奴の目はパッチリと開いてこちらを見ていた。

そして奴は顔にクシャクシャとシワを寄せ始めて泣き出したのであった。

俺は慌てて抱き上げてさっきの戦法を取ったが、今度は全然効かなかった。

俺は冷静さを失った。ナゼだ。完璧だったはずなのに。何がいけないかったんだ。

俺は自問自答を繰り返したが、そんな調子ではなかなか上手く技を繰り出せる訳もなく、腕の中の奴は泣き声を一層荒らげた。それを見ていた妻が凄い勢いで俺から奴を奪い去った。

俺はさっきまで感じていた重さが突然腕の中から無くなった虚しさを感じて、この戦いが終わり、俺が完敗したことを悟った。

妻は少し怒った口調で、そんなに力強く振ったら駄目に決まってるでしょつ。

オムツよオムツ。と言うと、奴をソファーに寝かせて起用にオムツを変えたのだった。

それは見とれるくらいの見事な早業だった。

そして、奴の満足気な笑顔を見ると、少し機嫌を直して薄笑いを浮かべて、

残念だったわね。寝かせるテクニクは認めるけど、その前の支度が甘かったわね。寝る前には布オムツから紙オムツに変えてからでないよ、この子凄いいおしつこの量だから気持ち悪がつて直ぐに起きちゃうのよ。と、優しく抱きかかえて揺らし始めた。

つわものであるはずの我が宿敵は見るもだらしのないトロトロの笑顔を浮かべてはしゃぎ、その内、寝てしまったのだった。

やはり、母の胸は父の胸には勝てないらしい。無念なんちゃって。

妻は暴れん坊の我が長男を寝かしつけた。

相変わらず見事な寝かしつぷりだった。

俺は、妻に小声で囁くように言った。

それじゃ、あいつら待たせてるから行ってくるわつ。

しかし、妻は俺の襟首をつかみ、あらつ、寝かしつけられたらつて約束のはずよ。と言って、俺に自宅謹慎をいいわたしたのだった。

俺の苦勞はなんだつたんだ。

俺は落ち込んだ。しかし、いや、まだ戦いは終わっていない。次こ

そは。

そう誓いつつ、連中にしげしげと断りの電話を掛けるのだった。
おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640c/>

ラブカクテルス その10

2011年10月4日10時26分発行